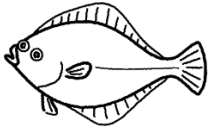
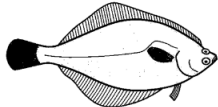





目から鱗の魚の名前の由来

落語「やかん」で、知ったかぶりするご隠居が、八五郎に魚の名前などの由来を説明するくだりがある。でもこれは、苦し紛れのこじつけ・デタラメである。そこで、本当の魚の名前の由来を、知ったかぶりのヒライが調べてみた。

漢字	落語「やかん」的発想の魚の名前の由来	本当の魚の名前の由来
くじら 鯨 けいげい 鯨鯨 雄が鯨 雌が鯨 久治良	朝9時に、海面に勢いよくブシューッと潮を吹き上げる。これを見た漁師が「9時ら（だ）」と叫んだから「クジラ」になった。もし潮を吹くのが5時だったら「ゴジラ」になったはず。	体表が黒で、肉が白なので「黒白」から、「クロシロ」→「クシラ」から「クジラ」になった。口が大きいから、口広（クチヒロ）が訛って「クジラ」になったという説も。
ひらめ 鯧 平目	平たい体に目が付いているから「ヒラメ」  左向きになるのがヒラメ	体が平たいことから「平べったい魚」という意味。眼の位置に着目して、「眼の側（ひら）」→「ひらめ」となったという説も。
かれい 鯧 加良衣比	カレイは、ヒラメの屋敷に仕えて、ヒラメの家来（けらい）だったので「ケレイ」が訛って「カレイ」  右向きになるのがカレイ	体の色が枯れた木の葉のような色をしていて、魚のエイに似ていることから「枯れエイ」→「カレエイ」→「カレイ」もともと両面が黒かったが2つに裂けたもので、目のあるほうが片身を捜しているという話から「カタワレイヲ（片割魚）」から「カレイ」になった。
たい 鯛	あの魚は、決して1匹では泳がない。隊を成なして泳ぐから「タイ」なのだ。先頭を泳ぐのが「鯛長（たいちょう）」群れからはぐれて悪さをするタチの悪い連中が「愚連鯛（ぐれんたい）」! 	タイの体型から「平魚（タヒラウオ）」と呼ばれていたが、省略されて「タイ」と呼ぶようになった。位が高く、上等という意味の「大位」（タイイ）から「タイ」と呼ばれるようになったの説も。「メデタイ」という言葉から「タイ」の名がついたというのは俗説。
いわし 鰯 鰯・鰯	イワシは体も小さいが、気も小さい。もしも迷子になってはいけないから、犬のように電信柱にシーを掛けたいが、海には電信柱が無い。そこで岩にシーをした。「岩しー」→「いわし」になった。	いつも他の魚に食べられている弱い魚。傷みやすいという弱さの「よわし」から「イワシ」になった。貴族の食べない卑しい魚という意味の「賤し（いやし）」が変化したの説も。
漢字の旁は、日本周辺の海のどこでも獲れることと、一年中・周年で獲れるという意味から周の字が当てられた。		10月4日は「104（いわし）」と読む語呂合わせから「イワシの日」

<p>まぐろ 鮪</p>	<p>大群で泳ぐ姿が遠くから見ると、真っ黒な塊に見えるから「真っ黒」と呼んでいたのが、縮まって「真黒（まっくろ）」→「まぐろ」になった。</p> <p>隣の有は「外側を囲む」という意味があり、鮪は海を囲むように大きく回遊することから、この漢字がつけられた。</p>	<p>泳いでいる姿を海面から見ると影が黒いので「真黒（まぐろ）」であるという説と、目が黒いので「眼黒（まぐろ）」であるという説。</p> 
<p>かつお 鰹 松魚 堅魚</p>	<p>威勢の良い魚で、他の魚と喧嘩をしても負けたことがない。勝つ魚で「勝つ魚（かつうお）」→「カツオ」になった。</p> 	<p>身質が柔らかく傷みやすく、堅く干して食用にしていた。「身が堅い」という意で「堅魚（かたうお）」が「カツオ」になった。疑似餌（ぎじえ）で釣れるくらい「頑な魚（かたくな）・頑魚（カタウオ）」→「カツオ」になったという説。弱いイワシに対して、強い魚だから「勝つ魚」→「カツオ」となったという説も。</p>
<p>さば 鯖 青花魚</p>	<p>気性や気前が良くサバサバしているが、いい加減で数え間違いや数をごまかす「サバを読む」が「サバ」になった。</p>	<p>大勢で集まって群れをなすことから、たくさんを意味する「サハ」という古語が→「サバ」になった。 歯が小さいことから「小歯・狭歯（さば）」と呼ばれ→「さば」になった。</p>
<p>こち 鮪・鯨 ぎゅうびぎよ 牛尾魚 べんしぎよ 鞭子魚</p>	<p>こっちへ向かって泳いでくるから「コチ」だ。ずっと一方向にしか泳ぐだけでなく、逆方向に泳ぐこともある。そういう時は、自分が向こうに回ればいつも、こっちへ泳いでくることになる。</p>	<p>魚形が、神官が儀式の時に使う「笏（こつ）」に似ているところから訛って「コチ」になった。漢字の鮪は、コチが餌を砂中から飛び跳ねて捕食するところから跳躍（はねおどる）の意。</p>
<p>たら 鱈 大口魚 大頭魚</p>	<p>「まだら」の「ま」抜けて「たら」になった。大食漢で、大きい口で、足る（たる）ほどに、無闇矢鱈、鱈腹食べる、さらに手当たり次第なんでも食べてしまう、出たところ勝負で、いい加減な出鱈目な行動をするから「タラ」になった。</p>	<p>体表にある斑（まだら）模様から「マダラ」→「タラ」。 漢字の鱈は、雪の降る季節に捕獲され、血が足らぬような、雪のように白い身をしていることから「雪の魚」→「鱈」になった。</p>
<p>鰻 魷 鰯 鰺 鱈 鱈 鱈 鱈</p>	<p>ヌルヌルしているから「ヌル」と呼ばれていた。ある時、鵜（う）がこの「ヌル」を飲み込もうとしたが長い体を持っているため、なかなか喉を通してゆかず、飲み込むのにたいそう難儀をした。「鵜が難儀」→「鵜、難儀」→「鵜難儀」→「ウナギ」となった。</p>  <p>鰻を焼いたのを「カバ焼き」というのは、馬鹿に美味うまいから、はじめは「バカ焼き」といったが、ひっくり返さないと焦こげてしまので、「バカ」をひっくり返して「カバ焼き」にした。</p>	<p>胸が黄色いので「胸黄（むなぎ）」という説。細長い体形が棟の木に似ていることから「棟木（むなぎ）」という説。 「身」の古い語形が「ム」なので、「ムナガ」（身長）→「ムナギ」になったという説。 「鰻」の隣の字「曼（まん）」は、ずると長く伸びた草木の「つる」も「曼」というように、「細長い」「長くのびる」という意味から、この「曼」という字が、細長い魚に当てられた。</p> 

